

## 特集 共生の可能性と限界プロジェクト 土地をめぐる法体系の葛藤

### はじめに

本特集は、2005年4月に作成された科学研究費によるプロジェクト「生活世界とりわけ土地との関係をめぐる伝統的法体系と外来法体系の葛藤 共生の可能性と限界の研究」の報告書を基礎として、研究紀要における特集として構成しなおしたものである。この科研プロジェクトの目的および方法の詳細は報告書を参照いただきたいが、大づかみにいえば、「土地」をめぐるかなり広範な問題を見直してみようというものであった。文化と政治と歴史が干渉しあう場としての土地環境という地平のなかで、先住民権や「伝統的」世界観という主題やそれらをとらえる方法としての人類学、歴史学、社会経済史の有効性を検証することが本プロジェクトの共有された問題意識だった。

報告書には10名の参加者が寄稿したが、本特集では諸般の事情から8名が執筆している。また多くの寄稿者が、基本的に報告書と同じ原稿を寄せているが、崎山氏と中田氏は、ほとんど新しい原稿ともいえる改稿を施されている。またそこには上記の科研プロジェクトの問題意識を継承するかたちで申請し採択され2005年度より開始されたプロジェクト「植民地化以後の土地および環境利用の変化 その現状への影響アセスメント手法構築」による調査研究の成果もすでに一部盛り込まれている。

科研のプロジェクトにおいてアラスカの漁業、北海道のアイヌの伝統的知識の再構築等、多岐にわたる口頭報告で寄与いただいた岩崎氏の論文は、とりあげていただいた個別の問題が将来的に収斂してゆく「環境影響評価」という問題にかかわる最新の動向を詳細に紹介し検討し、新たなプロジェクトの問題意識の今後の展開のひとつの方向を示している。

マルクスの業績の深い読み替えとラテンアメリカでの現代社会の検証を並行して進められておられる崎山氏は、プロジェクトの表題に示された「伝統」と「近代」が単純に対立するのではない、「法」と「経済」というカテゴリーの錯綜体のなかに土地所有をめぐる農民の抵抗を見出す視点を、メキシコ・チアパスの調査を裏付けとして再確認している。

19世紀後半、ニカラグアの先住民社会に「共和国」の支配がおよび、土地を奪われ「自由な」先住民労働者が生み出される過程に視線を向ける佐々木論文は、現状の調査に裏付けられた解像度の高い眼で共和国の軍・警察のアーカイヴを読み解き、近代共和国の土地をめぐる錯綜した暴力の応酬から「伝統的」共同体が立ち上がったことを論証している。

今日のアフリカの困難を凝縮したコンゴ民主共和国（旧ザイール）の凄惨な内戦をとりあげた澤田論文は、1998年の内戦勃発にいたるモブツ体制末期にすでに、植民地期にまでさかのぼる杜撰な登記制度による土地争いを契機に、東部ザイールでは民族間紛争が散発し今にいたることを明らかにし、少ない情報源を精査する方法の例示ともなっている。

イヌイト社会について長期にわたる現地調査を継続しているスチュアート氏の論文は、ヌナヴト準州成立に象徴される、先住民の土地との固有の関係がどのような歴史的背景と法的な状

況の中で継承され再創造されてきたか、カナダを中心に簡潔に提示している。「土地」を「地所」と「大地」と「故地」に分節するという提案は興味深い。

高村論文は、本プロジェクトでは十分に主題化できなかった、人間が死後回帰する「葬られる場としての土地」に、韓国の済州島での詳細な調査に基づいて焦点を合せている。葬礼の一部ではあっても日常性の色合いが濃く主題化されにくい墓の草刈り「伐草」に、緻密な観察と歴史的背景の把握をつうじて「墓による社会の再生産過程」を検証している。

科研報告書においては、中田論文は、19世紀後半からのマクロなグアテマラ史と現在の住民からの聞き書きというミクロな歴史を結合した興味深い記述によって、コーヒー栽培導入と普及のインパクトが生む動態を、土地所有関係を軸としながら地域内の差異に目配りして描き、「慣習法」を固定的にとらえることの錯誤を指摘した。本特集における全面改稿では、一地域農業史の定点観測ともいえる調査対象地が、1930年代のシカゴ大学の人類学者たちの研究プロジェクトにおいて「閉鎖的共同体」のモデルと擬されることで「モラルエコノミー論」などの理論展開をリードする役割をあてがわれたこと、そうした理論展開の中で「経済」の余白（これは渡辺の表現である）におかれた「荒蕪地」が、その意味を適切に問われる時、問題意識の根底的な組み替えが必要となるであろうことが指摘されている。

最後の渡辺論文はタイトルのとおり研究メモと呼ぶべきものだが、アメリカ合衆国成立史の「独立」から南北戦争期までのニューヨーク州におけるインディアン土地収奪過程がどのようにとらえられているかについて、最近の研究業績をレビューしつつ、アメリカ人類学の父L.H.モーガンの学問形成を重ねて描いてみた。

以上は編集者による不十分な要約にすぎない。誤解は寛恕いただきたい。とりあげられている地域が多岐にわたることは予定のことだが、土地をめぐる主題の設定、研究素材、方法論については特集として統一性をもたせようという努力を払ったわけではない。しかし、土地をめぐる葛藤のひろがりや問題の多様さとともに、そこにコンスタントな条件として広がる人間の生活の場、土地という重力の収斂する重心のようなものは確かめられたのではないだろうか。共生の可能性と限界の条件としての土地への多様な視点の設定がこの特集の目的であり、その一端が実現できていれば諒としたい。

特集編集者として  
渡辺 公三